

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作：ウッチャン大好きっ子

- 登場人物 -

- ・王 凱歌
- ・円道寺 きなこ
- ・島村 市江
- ・コー・村木
- ・船木 健一
- ・八 雲
- ・范 火清
- 新キャラ
- 国際二課・稲垣 勇助

- ・円道寺 美智
- ・円道寺 はな
- ・円道寺 雁太郎
- ・牛田 正樹
- ・黒谷刑事等国際二課のみなさん

~プロローグ~ <交錯する思い>

- 2002年12月25日 -

この日、国際指名手配犯が捕まった。王 凱歌。
”殺人マシン”の異名を持つ天才スナイパーである。
しかし、その瞳には、凶悪犯と言うには、
あまりにも暗くそして深く重い悲しみがこもっていた。
そして、その瞳のスナイパーを悲しげに見つめ、送り出す一人の女性がいた。

円道寺 きなこ。彼女は、警察庁国際二課在籍の刑事である。
彼女は殺人犯・王 凱歌の真実の姿を知っていた。
本当は、優しく、そして母思いの、ちょっと子供っぽい彼を。
今は、彼のために何もして上げられない事。
自分の無力さに押しつぶされそうになっていた。涙が溢れ落ちそうになった。
しかし、凱歌に心配を掛けまいと我慢していた。
だが、頭の中では別のことがよぎっていた。『弟よ』。
この言葉はコー村木がへりで飛び去る際に、言っていたように見えた言葉。
もちろん、聞こえたわけではない。
読唇術ができるわけでもないのが、確かにその様に感じたのだ。
きなこは、このことがどうしても頭から離れなかった、。。
「きっと、ホイさんに言ったんだ、。。でも、なぜ、。。」
不思議であると同時に、言い表われない恐怖のようなものを感じていた。

一方、凱歌を連行している刑事。

船木 健一。彼はきなこの婚約者であり、上司である。
しかし、船木は、「きなこは自分以外の誰かを思っているのでは？」

と少なからず思っていた。

それが、きなこのこの2日間の行動、そして連行される凱歌を見つめる眼差しから、気が付いてしまったのだ。

「きなこが思っているのは、王 凱歌なのだ。」と。

凱歌に対して悔しさのような気持ちがないと言ったら嘘になるだろう。

きなこを好きである気持ちに変わりはないのだから。

しかし、船木はここで「一旦、きなこは諦めよう」と決心した。

元々、きなこには、まだ自分の妻になるには少し早いのもかもしれないと思っていたのだ。

「時間が経てば、凱歌を忘れるかもしれない。僕にはまだチャンスはあるさ、、、。」と。

そんなことを考える船木に対し、連行される凱歌は二つのことを考えていた。

一つは、きなこのことだった。『僕がいなくても幸せになって』。

この言葉は連行される前に凱歌がきなこに言った言葉だ。

これは、凱歌が心の底から思った言葉である。

しかし、初恋の相手に、この言葉を言うことは、相当の覚悟だった。

でも、自分といるよりは、船木と一緒にいる方が、

絶対に幸せになれると思ったからこそ、言えた言葉だった。

(しかし、実は、船木が、きなこの結婚を諦めていたとは。。)

運命とは皮肉なものだ、、、。)

そして、一番考えていたもう一つのこと、やはり自分の人生を狂わせた

<1211ボス・コー村木>を倒すことができなかったことである。

そのことがとても重くのしかかっていた。とてつもない不安でもあった。

母や円道寺家のみんなに危険がないかと、恐れていた。

しかし、自分が警察に捕まっている以上、

周りの人々に危害を加えても何の意味もないだろうと思直した。

こうして、様々な思いを乗せたパトカーは警察庁に向かって走り続けた。

しかし、その背後には不気味なヘリが一台、飛んでいた。

まるで、愛する子をいとおしく思い、送り出すかのように、、、。

- それから1ヶ月後 -

警察庁の前に多くのマスコミが、

国際指名手配犯の姿を捉える為に今か今かと、どよめき待ちわびていた。

厳重な警備の元で国際指名手配犯・王 凱歌が拘置所に護送されるのだ。

そのテレビ中継を固唾を飲んで見ている一家があった。円道寺家である。

この日、きなこは非番であったために家族と一緒に、

複雑な気持ちでテレビ中継を見ていた。

あれから、きなこ船木は、正式に婚約は解消されていた。

双方から、解消を言い出したのである。

船木からは、「きなこを妻にするには自信がない。」ということ。

きなこは船木に「自分は船木課長の妻には荷が重すぎる。

もっとお似合いの方がいると思う。」と言うものだった。

きなこが、そんなことを、ふと思い出していた時だった。
マスコミが騒ぎ出した。ついに、王 凱歌が出てきたのだ。

凱歌は、顔を隠すこともなく、下を俯きながら進んでいた。
その瞳は、殺人犯でなく悲しみを秘めた瞳だった。
レポーターたちが一斉に凱歌の表情を伝えた。
しかし、それは凶悪犯としての外見を伝えるものだった。
円道寺家の面々、そして凱歌の母・市江は悲しげに見つめていた。
円道寺家では皆、「ホイさん、、、。」と呟き、母市江は、「凱歌、、、。」と。

～第1章～<新たなる風>

王 凱歌の護送報道から数ヶ月、きなこたち円道寺家は平凡な毎日を送っていた。
きなこは今も国際二課で事件を追っている。
紅龍は、いつもの様にお客が入らず、雁太郎たちが暇を玩んでいた。
そんな時、つい、美智とはなが「ホイさんが居たらな～。」とぼやいてしまった。
”ホイさん”とはあの指名手配犯・王 凱歌のことである。
偽名を使い、円道寺家に入りこんでいたので、今でもそう呼んでいる。
円道寺一家は、ホイが殺し屋だとは今でも思えないのである。
この話題になると、一気に空気が重くなってしまう。「ごめん。」とはなが謝った、、、。

国際二課は、大きな密輸組織の捜査をしていた。
その中で情報をインターネットで調べていた際に、
不思議な情報にきなこは目を止めていた。
その情報とは<天才スナイパー・王 凱歌を超える最強、最悪の暗殺者が
日本にやって来て、王 凱歌を助けに向かった。二人が手を組み、暗殺を行う。>
という根も葉もない噂のような情報だったが、
きなこには言い表せない不安というか、直感で何が感じたのである。
しかし、証拠がない以上、捜査はできなかった、、、。
第一に、王 凱歌を超える者がいるとは誰も思っていなかった。
きなこも、王凱歌が以前に言った
『もう人殺しはしない。ライフルは持たない』それを信じていた。

国際二課は地道な捜査の結果、ついに密輸組織のアジトを発見した。
きなこたちは、アジトに突入することにした。
しかし、これが新たなる舞台の幕開けとなる疾風を巻き起こすことになる、、、。

- オープニング -

突入することになった密輸組織のアジトは表向きには、貿易会社である。
しかし、その表向きの貿易会社はかなり良い会社として名が通っていたのである。
まず、表向きの貿易会社の強制捜査をすることにされた。
(ちゃんとした内容の強制捜査である。)
明日、朝から行うことになり、国際二課の面々は準備をしていた。

きなこは、「今回の強制捜査は私の出番はなしだ。」 と思い、
のんびりとしていた。そこへ、船木がやってきた。

「ぼけっとしていないでしっかり準備して。」 きなこは船木に怒られてしまった。
その時、脳裏にホイさんとの思いがよぎった。

「オ、ワリ、キニスナテ。」

この言葉はきなこがいたずらで最も気持ちがこもった言葉として
日本語のできない(と思っていた)ホイに教えたものだった。
とても平和でいい思い出である。

きなこは、ふと微笑んだ。船木は不思議そうに見つめていた。
それに気付き、きなこは、「すみません。すぐに準備します。」と言い、準備をし始めた。
「ホイさん、今どうしているんだろう?」とふと思った。

その頃、王 凱歌は今までの狙撃について、順々に取り調べに応じていた。
あまりの素直さから取り調べをする刑事は驚いていた。
しかし、それは素っ気無さを感じられるくらい静かなものだった。

刑事たちは、その素っ気無さに腹を立てていた。
そう、その素っ気無さは反省していない様にさえ思えてしまうぐらいだった。
だが、事実はそうではない。
凱歌は自分のしたことの重さ、重大さに今更ながら大きく感じていたのだ。

きなこは凱歌の取り調べの担当から外されていた。理由は簡単である。
関係者と逢わせるわけにいかないからである。
凱歌は、取り調べの合間に母の病気のことや円道寺家のこと、
そして、きなこのことをいつも、考えていた。
そして、「もう、二度と逢えないのだろうな。」と結論し、取り調べにまた臨むのである。

- 翌日 -

きなこたちは朝から強制捜査を始めた。
社内に国際二課等の刑事が入ると急いで証拠を消す社員たちが見えた。
刑事たちは急いで証拠を消す社員たちを止めようとした。
すると、社員たちがなんと襲ってきたのである。
社員たちは唯一の女性であるきなこに襲い掛かった。
しかし、きなこは小さい頃から少林寺拳法を習っているだけに、
他の男性刑事よりも遥かに強いのであった。
そばにいた黒谷刑事ら男性刑事たちは、とっさにきなこの後ろに隠れてしまった。

- アクションシーン -

(これは皆さんのイメージにお任せいたします。どんな感じかと言いますと、
やや狭めの古い感じのオフィスで男性社員が棒などの武器で攻撃をするのを
きなこが軽々と避けたり、反撃しながらバタバタとあっという間に全員倒してしまう。
といった感じです。
エピソード2の始めのきなこのアクションみたいな感じです。)

あっという間に敵が片付いたオフィスで、
きなこが船木たちにもう大丈夫であることを伝え、
襲ってきた社員たちを連行していった。
あとに残った刑事たちは残された書類から証拠になりそうなものを探すことにした。
きなこは大変な戦いの後で疲れてはいたが、疲れた体を押しして証拠探しをした。
そんな中で、会社に残っていたパソコンのデータを調べていた
国際二課の稲垣 勇助刑事がほとんどのデータが消されている中で、
消されていないパソコンを偶然見つけ、
その中からこの貿易会社と密輸組織を裏付ける証拠を発見した。

さらに、その中から、あの”1 2 1 1”との関係が出てきたのである。
それは、武器の密輸をしていたという証拠であった。
そう、ここは1 2 1 1の日本支部的な役目もしていたのである。
そんな中で、叩き壊されていたパソコンが一台あった。
データを消す時間がなく、慌てて壊したのだろう。
それほど、この中にはすごい情報があったのだろうか、皆が考えていた中で、
国際二課一パソコンに詳しい稲垣が突然こう言った。
「もしかすると少々のデータなら見られるかもしれません！」
稲垣曰く、この壊れ方ならば中にあるハードディスクが
使えるかもしれないと言うものだった。
早速、船木は稲垣にデータの取り出しを命じた。
しかし、いろいろとパーツがいるため、時間が掛かるということだったので、
このことは稲垣に任せ、他の者たちは他に情報、証拠がないか探すことにした。

- 数時間後 -

船木たち国際二課は手に入れた証拠も持って、貿易会社を後にした。
あの後はあまりいい証拠は見つからなかった。
本庁に戻り、今回の強制捜査で手に入れた証拠を整理し、立件の準備をした。
きなこは久しぶりの戦いでクタクタに疲れ、
家に帰るなりいつもの雁太郎との晩酌もせず、寝てしまった。

- 数日後 -

ついに稲垣によって、例のパソコンから取り出したハードディスクの中身が
見られるようになった。
思っていたよりも難しかったようで、稲垣はここ数日寝ずに頑張ったらしく、
心身ともにクタクタであった。
船木たち国際二課の面々はその頑張りに驚かせていた。
今年新人として配属になっての初めて、役に立てると張り切った結果である。
しかし、修理した稲垣曰く思っていた以上にハードディスクが傷ついて、
見れないところが多いかもしれないということだった。
とりあえず、見れる所を見てもみることにした。
大部分のロックは外しておいたので、簡単に見ることができた。
内容は裏帳簿や武器などの密輸の記録などだった。
これらのデータは、ほとんど傷がなかったので、
しっかりと見ることができ、バックアップを取る事ができた。

しかし、一つだけロックが何十にもなっているところがあった。

そこの解析がまだだった。

どうしても、最後のロックが外れなかったのである。

「キーワードが見つからない。」と稲垣は頭を抱えてしまった。

そんな中、きなこはそのキーワードの文字数が気になった。

珍しいことに、「1文字」なのである。その時、きなこははっとした。

<弟>。この言葉が頭をよぎったのである。

「ねえ。"弟"って入れてみてくれない？」ときなこは稲垣に言った。

稲垣は「漢字ですか？んん〜。」と不思議がっていたが、賭けてみることにした。

稲垣は慎重にキーワードを入れていった。「弟」と入れ、Enterを押した、、、。

ハードディスクがキーワードの確認をし始め、最後のロックが解除され、

稲垣は唖然とし、驚いてしまった。

「どうして、分かったんだ!？」 船木たち国際二課の面々はきなこに聞いた。

きなこは「勘です。勘、、、。」と誤魔化した。

なぜか、この時、コーの言葉を感じたことを隠した方がいいと直感したのである。

とりあえず、内容を見ることにした。

しかし、このデータは大部分のデータに傷があるために、

やはりエラーが起り読み取れないため、稲垣はプログラムを変え、

なんとか見れるようにした。

その鮮やかな動きに皆、唖然としていた。船木は稲垣の才能に内心、舌を巻いていた。

なんとか、内容が見れるようになった。しかし、どうしても読みない部分があった。

内容は、初めの部分は中国語の様であったが、途中から暗号化されていた。

初めの中国語は翻訳ソフトにより日本語に直すと、「指令状」と書かれてあった。

1211のボスからの指令状であるらしい。

暗号は特別なもので、データが傷ついているため、

解読は難しいことが分かったが、その暗号を眺めている最中になんと!

「これは、、、!」 皆が声を上げた。

暗号化がされていなかった部分があったのである。

その内容は、王 凱歌に関することだった。王 凱歌の逃亡計画のようだった。

しかし、傷がひどく、重要なところが消えてしまっていたが、

日時の日にちだけが読み取れた。「2日」とあった、、、。

それは何月のことを指していたのかは、予想が付かなかった。

このことは船木により、凱歌の取り調べをしている刑事たちに伝えられた。

だが、信憑性がないために、結局、相手にされなかったのである、、、。

このことが心配であったが、大きな事件が片付いたので、

船木は「この五月の連休はゆっくり休む様に。」と国際二課の刑事たちに言った。

きなこは凱歌の事を気にしていたらしく考え込んでいた。

それに気が付いた船木は優しく言った。

「心配するな。凱歌の担当刑事には言っておいたから。」

しかし、きなこにはこの言葉にも、不安が拭い切れなかった。

この言い表せない大きな不安が。恐怖に近い不安が体を包んでいった、、、。

~ 第2章 ~ < 消える >

- 5月2日夕方 -

王 凱歌は今日の取り調べを終え、拘置所へ連行されようとした時だった。突然、王 凱歌を含める取調室に居た人々の記憶が途切れた、、、。
(暗転)

- 翌日、連休初日 -

きなこたちは、珍しく「店閉めて、家族旅行に行こう。」という雁太郎の言葉から、この連休は久しぶりに家族旅行に行くことになっていた。最初、きなこは「家でゴロゴロしたい」とおやじのようなことを言って、嫌がっていたが結局、連合軍に押し切れ行くことに、、、。

行く場所は、雁太郎が「温泉がいい。」と言った事ので温泉に行くことに。これには、みんな賛成した。

しかし、突然の事で、温泉有名地の旅館はもう予約で一杯と言うことだったので、妹のはなや、母美智の調査により少し遠出し、新潟の湯沢温泉に行くことになった。車で旅行になったが、円道寺家で車の免許があるのは、運転が下手なきなこと、大学生のはなだけである。美智と雁太郎は、恐ろしく思ってしまった。

なぜなら、きなこの運転の下手さは、雁太郎の中華料理ぐらいである。しかし、よい事に、はなは、きなこと違って、とてもうまいので、安心ではあるが。。朝は、きなこが運転することになった。昨日借りてきたレンタカーにみんなが乗り、眠い目を擦りながら出発した。

途中、パーキングによって食事したり、はなと運転手を交代しながら向かった。きなこの運転に酔ってしまいそうになると、はなに交代していた。(ほとんど、はなの方が運転していた。) こうして、交代を繰り返しながら新潟の湯沢温泉に向かった。

- 3時間後 -

朝早めに出たお陰で混みも少なかったので、少々時間が掛かったが着く事ができた。チェックインには時間があつたので、観光をすることにした。

雁太郎は、もう温泉に入ってお酒を飲みたい様であった。来る途中に貰った観光地図で地ビールが飲める所があるので、そこに行くことにした。雁太郎ときなこは、そこで地ビールを堪能していた。母美智に怒られながら、、、。

チェックインのできる時間を過ぎたので、一度旅館に行くことにした。今回、泊まる旅館は、連休間際に取りれた旅館としてとても良い旅館だった。円道寺家の面々は旅館を見るなり、少々驚いてしまった。その旅館は普通の旅館に比べて安いのに、ここまで良いとは思っていなかったのである。

その旅館の名前は「湯華鳳(ゆかほう)」。
あまり歴史は長くないものの、和の気品さがある綺麗な旅館である。

円道寺家はここに二泊するのである。

きなこと雁太郎は食事の前に地ビールの酔いを覚ますために、温泉に入ることにした。

温泉は、とても良い眺めの露天風呂であった。

きなこは「本当にここはあの値段なの？」と呟いてしまった。

食事も最高のものだった。山の幸が満載の料理だった。みんな、満足しきっていた。

きなこと雁太郎は、再び食事の残りをつまみに

日本酒など、おいしい新潟のお酒を楽しんでいた。

楽しい時間が過ぎていた、。

しかし、きなこは今回の旅行の際に大きな忘れ物をしていた。

携帯電話を家に置いて来ていたのだ。それが、後々に響くことになる。

- 東京・警察庁 -

一方、きなこたちが旅行を楽しんでいた最中に、

国際二課の面々は、連休であるのに、ほぼ全員集まっていた。

皆、「折角の連休を、。」と思いつつ、やってきた。

そこへ深刻な顔で船木が部屋に入ってきた。

その顔を見るなり、緊急事態を悟り、

一気に部屋の空気が張り詰めた冷たい感じになった。

船木はきなこが居ないことに気づき、黒谷刑事に聞いた。

「円道寺君は？」 黒谷刑事は「連絡が付きません。」

船木は「分かった。」といい、前に立った。少しの沈黙の後、船木は説明を始めた。

「今回、連休中に集めてすまない、。」

緊急事態が起きた、。王 凱歌が逃亡した。

いや、煙のように消えた。と言うべきかもしれない。この本庁から、。」

国際二課に驚きとどよめきが起きた。

「この本庁から？」「いったいどうやって！」

「煙のようになって、。いったいどういうことだ。」などの言葉が聞こえてきた。

船木は皆を静め、詳しい説明をした。

内容は、5月2日の連休前ということもあって、

凱歌の取り調べを、夕方まで終え、拘置所に連れて行くことにした。

準備をしていた際に突然、その場に居た刑事を含む全員が気を失い、

気が付いた時には王 凱歌の姿はなかったと言うのである。

しかし、取調室の外で、誰一人として凱歌を見た者はいなかった。

まさに煙のように消えたのである。この警察庁内から消え去ったのである、。」

それを聞いた国際二課の面々は愕然とした。

有り得ない事だったからである、。一体なぜ、。

疑問は刑事たちの中で深まっていた、。

- 続く